

Activity Report Part 5, AIR Exchange Program between Youkobo and ECoC

Y-AIR case study Part 1, ArtCamp, International Summer School of Art, Pilsen, Czech

アートのサマースクール ArtCamp in チェコにおける日本の取組



Youkobo Art Space, Tokyo



もくじ

- | | |
|-------------------------------------|---|
| 1. はじめに | 村田達彦 (Youkobo Art Space) |
| 2. 寄稿 ArtCamp2015への日本の学生たち | Dr. Lenka Kodytkova レンカ・コディトウコヴァ (ArtCamp Executive Director) |
| 3. 活動概要 | |
| ① ArtCamp参加3年の活動と今後の展望、参加者、教員のコメント | |
| ② 新たな取り組み、アーティスト講師派遣 | 町田久美 (アーティスト) |
| ③ インターンを通してみるArtCamp、日本版ArtCampの可能性 | 辻真木子 (Youkobo Art Space) |

- ArtCamp <http://fdu.zcu.cz/en/415-artcamp-about>
- Youkobo Art Space <http://www.youkobo.co.jp/>
- Microresidence Network <http://microresidence.net/>

関連資料

- | | |
|---|------------|
| Microresidence! 2015 Y-AIR事例集 Artist in Residence as possibilities and places for young artists | 2016/3発行予定 |
| Microresidence! 2014 The possibilities of Y-AIR in a trial between Japan and ECoC 2015 Pilsen | 2015/3 発行 |

はじめに

村田 達彦（共同代表、 Youkobo Art Space, Tokyo）

この冊子は、チェコの地方都市Pilsen市にある西ボヘミア大学で毎年夏に開催されている、アートの国際版サマースクール「ArtCamp」に、遊工房アートスペースと国内美術系大学教官(研究室)が協働して、学生および若手作家を派遣する実験プログラムの活動報告と将来展望についてまとめたものである。アートを介した短期滞在型異文化交流の体験機会をAIRの模擬体験の場と捉え、日本の若手作家志望の美大学生による体験を通じた異文化や多様性の理解、国際感覚の理解、そして英語によるコミュニケーション能力向上チャレンジに期待する事業として始まった。

かねてより欧州文化首都への作家派遣や交換プログラムに取組んでいた遊工房アートスペースがその存在を知ったのはEUジャパン・フェスト日本委員会からだ。2013年に初めて1名の美大生の派遣から始まり、その後も関係方面の理解と支援のもと、派遣参加者は3年間で7校16名となった。この貴重な機会の体験事業は、当方の活動にご理解いただく美大教官諸氏の協力をベースにEUジャパン・フェスト日本委員会の支援のもとに展開している。2015年には、ArtCampへの受講ばかりでなく、日本人講師の参画・派遣も実現、国際的に活動するアーティスト活動への新たな道も開けたと考えている。

この国際的でフレキシブルな公開講座への仕組みを学ぶため、2014年にはArtCamp責任者の東京招へいし、都内でシンポジウム・研究部会(3331アーツ千代田、女子美・杉並キャンパス、遊工房アートスペース)を開催、参加者からの成果報告と共に、現地大学の10年に及ぶArtCampの歴史と変遷などを理解することが出来た。また、2015年夏には、ArtCamp活動の仕組理解のため、開催時期に合わせ、準備から実施・終了の全期間、当方からのインターン派遣が実現し、受入現場での研修の貴重な機会を得ることができた。

現在、国内大学のグローバル化の要請は、美大にも及び、多くの美大での提携校との交換留学などの従来の展開ばかりでない、様々な試みも進んでいるようだ。本プログラムは、こうした背景から、広く作家志望の美大生が、現状から離れた創作体験のできる機会と共に、国際的な視野を広げ、英語でのコミュニケーション能力克服のための貴重な場であり機会と考える。こうした場への若手の自主的な参加への環境づくりのため、より広い周知の工夫、国内大学の公開講座、アートスクール、あるいは生涯学習講座などの応用・工夫で可能となる国際講座の開設など、本事業の経験を生かし、美術教育界とAIRの協働による国際化推進が期待できると考える。

ArtCamp2015への日本の学生たち

Dr. Lenka Kodytkova レンカ・コディトゥコヴァ (ArtCamp Executive Director)

ArtCampは国際的なサマースクールとして西ボヘミア大学芸術学部(UWB, LSFDA)が毎年開催する、チェコ共和国最大のサマースクールである。2005年以来、チェコ国内ばかりでなく海外からの参加者にも、3週間の会期中、創作と感激の素晴らしい環境をつくり、アートの広い領域に渡り発見や成長に寄与している。様々な年齢、国籍、才能の参加者たちは、当大学教官と共に、チェコばかりでなく海外からの招へいアーティストにより率いられる講座に出会い、共に制作する。ArtCamp2015では5人の日本人学生と1人のアーティストが、当大学、欧州文化首都2015Pilsen委員会、EUジャパン日本委員会そして遊工房アートスペースの協力で参加が実現した。この協力は2013年から継続しており、2013年1人、2014年は10人の参加があった。

参加の日本人学生には、受講成果と共に全ての参加コースを無事修了した記念の賞が授与された。また、ArtCampの体験を通し新たなに知り合った若者たちは、サマースクールと並行した放課後や週末の学外でのプログラムにも参加し、欧州文化首都Pilsenでの滞在を楽しんでいた。プログラムには講演アーティストの発表会、学生映画の夕べ、観光案内、展覧会やそのオープニングなどがあった。

類似のサマースクールに参加した日本の参加者からの報告から、このプログラムは若手作家への視野展望、新しい技や発想の習得、新しい友情や文化の獲得など、彼らの人生設計や創作活動へ重要な貢献をしていることが分かる。このような体験は、彼らの個人的な生活、海外留学やアーティスト・イン・レジデンスへの参加の将来設計などへの刺激となっている。



ArtCampの国際的な魅力的な環境は、参加受講生ばかりでなく招へいアーティストに因ってもたらされている。ArtCamp2015は米国、カナダ、ポーランド、仏、伊、ポルトガル、スロバキアからのアーティストと共に、初めての日本からの参加がチェコ・日本の協力で実現した。

講師となった町田久美は、独特の画法と構図で、日本ばかりでなく海外でも高く評価されている作家だ。彼女は、伝統的な日本画を、独自の現代的構図と主題をもって、とても緊張感のある、時には破壊的な独特の形を通した最新のものとしている。その町田久美が、ArtCamp2015の1週間の伝統的な日本の墨絵の講座を担当し、受講生に伝統的な道具や材料―墨、日本の筆、和紙などの紹介し、「水墨画」技法を指導した。参加者は日本の伝統的な巻物に金や銀の箔や顔料での装飾を学んだ。

チェコと日本の協力の基、ArtCamp2015は初めての日本からのインターンをも受入れた。ArtCamp2014参加の女子美・院生の辻真木子が遊工房アートスペースの協力で再度の来訪となり、運営組織の視点からの体験と共に作家活動の支援やレジデンスプログラム領域の研究の実施をした。

11年間に渡るArtCampサマースクールは、美術を志す学生、招聘作家、そして一般市民の夏季講座として、広く知れ渡るところとなった。更なる成長のために、国際的な作家の招へいは重要な道筋だ。ArtCampは、当芸術大学の国際関係の構築や発展のための強力なプラットフォームである、学生や教員の移動機会の増加に寄与している。新たな魅力の探索や、大学の新たな国際的な可能性と企画を切り開く強力な道具となっている。日本の大学やアーティストとの協力は、サマースクールとその発展と共に、当芸術学部にとってもとても重要なことである。日本の仲間との継続した協力関係で、多くの日本からの参加学生やアーティストが、これからもPilsenに来てくれることを期待したい。



ArtCamp参加機会から得られたこと、そして今後の展望を考えるーアーティストを目指す若手への異文化体験の機会、ArtCamp

概要

チェコ・Pilsen市にあるUWB芸術学部の開催する夏期講座ArtCampへの、初めて日本からの参加機会となったのは2013年であった。その後、この派遣プログラムはEUジャパン日本委員会を中心とした支援を得て継続、3年間の貴重な体験の参加者は16人となった。その内2015年は講師派遣実現と共にArtCampの仕組み理解のためのインターン派遣に発展した。若手の海外での創作体験機会、そして一歩踏み込んだアーティストの海外での創作指導の機会創出の可能な場としてさらにこの試行を進めて一つの方向性を見極めることが出来ると考えている。

・Pilsenでの計画と実績：2013/2014/2015実績、及び201611計画

		2013	2014	2015	2016	備考
ArtCamp	受講者	1名	10名／5大学	5名／5大学	未定	大学教員推薦及び公募の若手作家
	ArtCamp 講師			1名	1名	
	インターン			1名	未定	
	研究者招聘		2名		未定	西ボヘミア大学
並行展開	AIR	チェコへ (OPEN AiR)	1名	1名	1名	公募作家
	作家交換	日本へ (遊工房アートスペース)		1名		
	Pisen 調査訪問		2名			遊工房

講座参加コース：アニメーション、アートセラピー、ブックバイディング、トイデザイン、フィギュアドローイング、彫塑、パフォーマンス、セラミックデザイン

講師参加：アーティスト・町田久美、墨絵講座、7/27（月）～31（金）講座実施

インターン実習：遊工房アートスペース・辻真木子、ArtCamp事務局での実習研修及び関連研究、ArtCamp2014参加

3-2. 経費負担の概要：

講座参加者及び講師は現地（UWB 及び Pilsen 市）からの支援（現地各機関には、EU ジャパン・フェスト日本委員会から支援が出ている）。インターン研修は、UWB と遊工房による。

3-2. 参加者および担当教員のフィードバックのまとめ

海外経験の少ない学生にとって、国外の教育プログラムに参加しながら異文化、様々な年齢、立場の人たちと触れ合う機会を持って有意義であったとの声大きい。文化や生活環境の違いや共通点を実感し、日本と世界を広く捉えられるようになった、日本の大学での制作環境とは違う空気の中での制作は刺激的であった。初めてのことが多く、現地にいる間はこの経験を消化しきれず、帰国後に色々思い返すことが多いなどの感想が挙った。

4. 今後の展望

海外での夏期講座への短期滞在機会は参加者自身の貴重な体験となっていると共に、本試行に賛同頂いた大学教官を通じた学内へのフィードバックなどで、ArtCamp 参加への価値が認識されてきた。参加者の意識の違いと共に、本試行の趣旨の徹底が不足していたことを反省に、参加者への導入講座開催を実施する必要がある。一方、美術大学での類似の体験機会との比較、国際 ArtCamp 開催の必然性の議論には至っていないのも事実だ。参加体験の広がりと共に、類似の短期滞在機会の現状についての国内外の調査、現状の大学における公開講座などの仕組みも含め、美術大学のグローバル化への一手段としての国際キャンプ開催の可能性など貴重なテーマが内在していると確信する。ArtCamp そして Pilsen との縁から展望するこれからの本活動の方向性検討と提案を以下にまとめた。

4-1. 2016 年計画

- ArtCamp への若手参加体験機会の継続
- 国際的な夏期講座・公開講座の調査（2016）
- Camp 講師のできるアーティスト（教官）による講座継続
- 国際的な夏期講座の展開（AIR と美大の協働で、2016 試行、2017 開催を目的）

4-2. 検討事項

AIR での滞在制作の機会創出を美術大学と協働で進め、国際間での交換の仕組み作り。

- 本プログラムの運営体勢

日本の多くの大学は提携校と交換留学制度などの国際交流制度を持っているが、学期の時期や単位制度の違いや語学力不足などもあり十分な展開となっていないと聞く。海外には様々なレジデンスがあり、大学制度の縛りがない機会により自由な経験が得られる工夫が出来るのではないかと。AIR プログラムと連携して行うことの可能性、大学生のキャリア形成のための講座かなど、実働を通じた活動の仕組みにすることを提案したい。AIR と大学の連携の必要性を感じつつも今ひとつしっかりした連携が取れていない現状にあり、ゼミだけでなく大学の「科」と AIR の連携の段階に入る時が来たとの声もある。

参加者、教官のコメント（参加者、支援教官よりのコメントからの抜粋）



佐々木美穂子 (2013年初参加・当時博士課程1年)

英語を話すことにはあまり自信が無かったが、話さなければならない環境に飛び込めば何とかなるのではという根拠の無い自信と共に参加した。初めての海外滞在制作を様々な支援の充実したArtCampで体験出来たことはとても有難いことだった。日本では当たり前のようにしていることをもう一度見直す貴重な機会だった。過ごした時間で感じ、考えたことは今後の私の作品制作に良いように影響してくるだろう。



加藤巧 (2014年参加、アーティスト)

使い慣れていない技術を再確認するのにより機会となった。学校、またはクラスというシチュエーションで制作するのも久しぶりで、新鮮だった一方能動的に行動しなければ得られるものが少ないとも感じた。短期間で、有益な関係を構築し、自身がやるべきことに標準を合わせる瞬発力と行動力があれば得られるものが増えるのではと思った。



渡辺志麻 (2014年参加、当時修士課程1年)

ArtCampでは今まで挑戦したことのない手法での制作体験であった。また、同時に他の受講生や講師との交流、意見交換をしたことがなによりも貴重な体験であった。初めて滞在するチェコでは、言葉や生活様式など分らないことが多く、誰かに頼らなくては前に進めなかった。そんな自分に対して情けなさを感じ、落ち込むこともあった。しかし、分らないことに落ち込むのではなく、自分でどう工夫し解決するかを考えることが大切だろうと3週間の滞在を通して思えるようになった。



八木恵理 (2015年参加、当時学部3年生)

ArtCamp本当にCampだった。“Camp”という言葉にはテントを張って海や川で野営するレクリエーションに近い意味合いと、探検隊などが未知の発見を目指し不安定な状況で留まり奮闘するというような意味合いがあるが、「ArtCamp」はまさにアートに対する探究心や知的好奇心を満たしてくれるエキサイティングなイベントだ。毎日何かを発見し考え質問し調べるようなことを自然にできていた様に思う。何歳になっても絶対忘れられない三週間であったことは間違いないだろう。

参加者、教官のコメント（参加者、支援教官よりのコメントからの抜粋）

OJUN(東京藝術大学大学院 美術研究科 教授)

それぞれ専門の制作があるだろうが、場所や向かい合う人を変えて、自分が普段やっているところから少し遠いところに手を伸ばして経験できるこのArtCampの取り組みはいいことだと思う。しかもそれが既に10年目。一区切りに10年と言ってもそれを毎年続けて行くというのはその努力やそれに賛同する若い人たちの情熱がないと続かないわけで、これからますます展開が楽しみだ。

長沢秀之(武蔵野美術大学大学院 造形研究科油絵コース 教授)

2013年から、遊工房に滞在しているアーティストを大学に招いてプレゼンや質疑応答をするアートワークコミュニケーションというゼミが始まった。これは英語学習が目的ではなく、日本だけでアートをしていると視野が狭まるのではないかと危機感から始めた。ArtCampから帰って来たら学生は、凄く大人になっていて、授業にアーティストが来た時も、質問を積極的にするようになり、行った効果が出たように思う。遊工房や日沼先生の取組みなどが日本のアートの可能性を引き出すのではないかと期待している。アートというのは、聖域に囲まれた中に閉じ込められないように、一般の人も広く参加すると面白いものができるのだろうと思う。それと同時に、専門性というものもないと面白くない。この2つは凄く矛盾するのだが、ごく一般的なレベルで考えたいところ、専門的なところで考えたいところ、この矛盾するところをどうバランスを取るかというのは課題としてあるのではないかと思う。

日沼禎子(女子美術大学大学院、アートプロデュース表現領域 准教授)

若い世代自らが国際的なネットワークをつくるか、また、私たち指導者・支援者はそれをどのようにバックアップするか。国境、世代を越えたコミュニケーションやネットワークのあり方は、アーティスト育成のための重要な役割を担う。ひとつの大学、あるいは都市部の大学だけが行うのではなく、国内外の地域、大学間のネットワークを通じて、多様なプログラム、多様な交流を進めていく必要があるのではないか。



新たな取り組み、アーティスト講師派遣

ArtCampへの受講生の参加の始まりと共に、現地からArtCamp講座への日本からのアーティスト講師による日本との関わりのある講座の開設の可能性の話があった。美大教官からのアイデアを頂き提案、2015年初めての開設は、現代美術家・町田久美さんの出前講座が実現することになった。講座提案の後、本人と現地との直接のやり取りでタイトル「Japanese Ink Drawing」として、5日間のワークショップ開催、とても人気の講座となった。日本からのアーティストの活動の場としての一つの道が開けたと考えている。

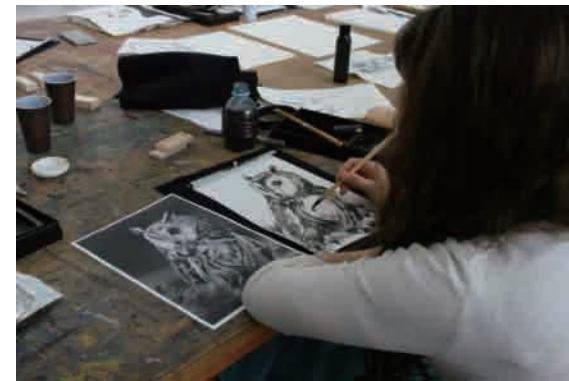
ArtCamp2015「Japanese Ink Drawing」を終えて・・・

町田 久美(アーティスト)

Pilsenは、2015年の欧州文化首都、墨絵の私の初めての講義は、幸いなことにこの地のArtCampでした。それは素晴らしい経験でした。ArtCampに関連するすべての人が協力的で友好的でしたので、私のクラスにストレスを感じることはありませんでした。私のクラスの参加者は、日本や日本に関連するものに興味を持っており、うち何人かは東京、京都に宿泊していました。クラスには、非常に暖かい雰囲気があり、彼らの思いやりで私の限られた英語の講義をサポートしてくれました。

私の講座は、参加者の理解と能力で、すぐ消化されたので、当初の予定を変更し、高いレベルに合わせて墨描画、砂子と切がねの技術を加えました。ドローイングなしでテーマを決め、彼らは失敗を恐れずに作業を進め、素晴らしいものでした。彼らは堅実な意図と独自のスタイルを持っていました。私も彼らから多くのことを学んだので、それは私にとっても新鮮な驚きでした。参加者は、掛け軸を選び、最終日に発表しました。展覧会は壮観でした！チェコの問題、オリジナルの物語や表現の興味深いスタイルなど、テーマは、多種多様。私は、彼らがコース終了後、その幻想的なアート作品を楽しんだことを確信しています。

多くの教師が世界各国から招待され、ArtCampを形成していました。また、これは私にとって非常にエキサイティングでした。参加者、生徒と教師、チェコ人と外国人のゲストは、Pilsenでの深い多国間の対話と協力を持つことができました。それは参加者全てのための偉大な出来事でした。私は本当にPilsenのArtCamp 2015のプログラムに参加できた名誉に感謝しています。



インターンを通してみるArtCamp、日本版ArtCampの可能性

国際的でユニークな活動であるArtCampに着目した我々遊工房では、ArtCampへの受講生派遣、代表の現地訪問に続き、講師派遣の実現、さらにArtCamp運営責任者のLenka女史を招聘し、マイクロレジデンス・フォーラム@3331(2014/11)や遊工房での研修会を開催するなどして関係性を深めていった。さらなるノウハウの取得のため、Camp開催準備から実施、終了までの裏方研修としてインターンを派遣することが受け入れられ、2015年、前年のArtCamp受講経験者であり、その後、遊工房スタッフとなった辻真木子を派遣した。

ArtCamp2015 インターンシップを終えて・・・

辻真木子(遊工房アートスペース)

「ArtCampはただのサマースクールではなく、マーケティングツールである」とArtCamp運営担当者はたびたび言う。インターンシップ・プログラムを通して現在のArtCampは主に①大学の個性創出としてのマーケティングツール(入学者増進、自校の学生に豊かな経験を提供するため)、②大学のパブリック化(広い層に向け、様々なアートへの挑戦機会を提供)、③プルゼニ市への関心促進とプルゼニ市民のアートへの関心促進、というこれら3つの事柄を軸に位置づけ、運営していると捉えられた。

①大学の個性創出としてのマーケティングツール

・大学内での様々な体験を通し、入学希望者を増やすため

受験生が志望校を選ぶにあたって、世界共通の傾向として、大都市がより選好されるということが挙げられる。西ボヘミア大学は首都プラハからバスで1時間ほどの地方都市に位置し、創立してからも10年余りでまだ若い大学である。そのため、大学の存在をチェコ国内外に広報する必要がある。ArtCampには入試準備のためのコースも用意しているため、受講者は講師から直接指導を受けられると共に、校舎、設備、食堂や寮などの大学施設、そして街全体を含む周辺環境を実際に見ることができ、進学を想像しやすい機会となっている。

・社会のニーズを探り、大学の質を高めるため

ArtCampのコース希望やアンケート評価等を踏まえ、写真やメディアアート等が年々人気を高めていると判断し、ArtCampコースや大学の専攻科目の追加や改善に努めている。ArtCampの評価を通して、大学や大学進学者の希望や目線を探っている。

・海外協定校との関係性を強くする、または国際交流のスタート地点に

海外協定校との取り組みとして、教員がゲスト講師として参加する、あるいは協定校の学生の希望を聞きコースを設定する等の対応を取っている。協定校からゲスト講師として参加してもらうことで、事務局と準備期間からプログラム実施期間までコミュニケーションをとりながら関係性を築くことができる。また、西ボヘミア大学の学生も協定校の先生の授業を受けることができ、留学を考えやすい状況になる。また、ArtCampを機に国際プログラムや協定関係を組むということもあり得る。相手側の教員はゲスト講師として実際に校内で活動することで、大学のことを多面的に理解できる。そして西ボヘミア大学も信頼を築いた講師を紹介することで、次のステップの実現に向け、丁寧に取り組める環境をつくれる。非常にパーソナルコンタクトを重要視した、丁寧なやり取りを心掛けていた。互いに互いを知る期間を設け、実験からの発展に臨んでいる。

インターンを通してみるArtCamp、日本版ArtCampの可能性

②大学のパブリック化:広い層に向け、様々なアートへの挑戦機会を提供

ArtCampは広く開かれた場であるからこそ、様々なバックグラウンドを持つ人と出会うことができ、互いに新鮮な情報交換ができる。同じコースを選択している人、放課後プログラムで知り合う人、地元の人など様々な出会いの場が授業内外を通じて用意されており、滞在型のプログラムのメリットだと言えるだろう。更に、毎週金曜日の午後には各コースの成果展を行い、大学を一般公開する。参加者の家族や友人、地元の人などが出入りし、展示会場としての公共性も持っている。

③プルゼニ市民のアートへの関心促進とプルゼニ市への関心促進

プルゼニ市の一般市民におけるアートへの関心は大都市と異なり、あまり高くないとArtCamp運営事務局は言う。その背景も鑑みて、この街に存在するFDAがアートによる街の活性化、アートの面白さをパブリックに訴えていく役割を担うべきであると考えている。また、ArtCamp参加者は、初めて訪れたとしても約1週間から3週間滞在することにより親近感とプルゼニという街に安心感、関心が生まれ、進学または観光などの次に続く訪問へと繋ぐことも考えられる。

ArtCampは、世界各国の人と新しいことに挑戦でき、参加者にとって楽しく魅力的なプログラムだが、開催のホストになることこそが醍醐味であると強く感じた。そこで育まれたネットワークは蓄積され、夏のイベントだけでなく大学の国際化や年間の様々なプログラムにも有効的である。また、運営は有志の学生サポーターも大きな役割を持っており、彼らにとってもイベントのマネジメントを経験できる学びの場になっている。そして、母国語ではない英語での各国アーティストや参加者のフォローを通し、国際的なコミュニケーションの重要性と面白さを実践で理解できる機会になっている。

FDAのように、地方都市に新しくできた美術大学で、大学の個性を国際化と共に強化し、国内外に向けて広報を積極的に仕掛けたい状況にあれば、マーケティングツールという側面を持ったArtCampからは学ぶところが多いだろう。一定期間国内外から人々が滞在し、話題になるという効果は、長期的に見れば行政との連携の面でも有益であると同時に、地域市民のアートや国際交流への関心を高める方法としても興味深い。

日本でも多くの美術大学が夏期・冬季講習などを実施しているが、海外からの講師と参加者を招致したものはまだ聞いたことがない。小さな実験的動きからでも、ArtCamp開催に挑戦したい大学があれば、ぜひ喜んで協力したい。

